

重症心身障害を持つ方に対する視覚へのアプローチ ～視覚優位の方の生活連動型活動を通して～

18CC10 末永 佑朔

I. はじめに

施設利用者は「見る活動」・「聞く活動」・「視聴覚の両方からの活動」など、様々なアプローチを受けて興味や関心を向けていた。私は、受け持ちの利用者が同じ視る活動の内容でも反応が違う理由を考察した。

II. 実習先種別・実習期間

医療型障害児入所施設

2019年6月24日～7月22日（うち23日間）

III. 事例紹介

Aさん 男性 36歳

障害程度等級 一種一級

主な疾患：脳性麻痺 精神遅滞

ADL 全介助 視力優位

快・不快の感情表出有 怒る、笑うなど表情は豊か

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

職員を目で追う、視覚的な興味関心が高いなどから視覚優位であること

言語理解が不明で、声掛けなどの反応も薄いことから聴覚からのアプローチは難しいこと

→物の動きや変化のあるものを見せることで、何かしらの感情を与えられるのではないかと

2. 介護上の課題

パラパラ漫画や水を使った実験を行い、楽しみや満足感を得て活動の幅を広げる

3. 介護目標

長期目標：楽しみや満足感を得られる

短期目標：物の動きや変化に楽しさや満足感を感じる

V. 実施及び結果

◇パラパラ漫画

・Aさんの興味関心を引くものではなかった、実施中に紙を破ってしまった

→Aさんにとって紙は、自分の好きなように触り感じるものとして捉えているため、破くという行為に至ったと考えられる

◇竜巻発生装置

・Aさんが興味関心を示すものだった。水の落ちる様子や回転する水を注目してみていた
→何かしらの感情をあたえられたのではないかと

VI. 考察

介護過程の長期目標である「楽しみや満足感を得られる」は達成できなかった。しかし、Aさんが日々過ごす日常の中で、一つに集中する時間を作ることができたことに関しては評価している。パラパラ漫画はAさんの興味関心を引くものではなかったと分かったが、水の実験(以後、竜巻装置と呼称する)は注目していた。ではなぜ、同じ「見る」でこのような差ができたのかを考えると、杉田は「発達の特異性を十分に理解したうえで、発達状況を把握し評価を行わなければならない。また重症心身障害の発達はきわめて初期にあるということ、発達領域や因子による違いがみられることなどに留意して援助計画を立てていく必要がある。」¹⁾ また、「重症児(者)の表現能力については年齢が上がっても向上する傾向にある事を留意したうえで個々の特性に合った日中活動を行う必要がある」¹⁾と述べている。このことから、活動計画の内容は移動運動・理解能力・対人関係などの発達のアンバランスに留意し、各領域を考慮したものであること、発達年齢のみならず生活年齢にも配慮した内容であること、そして個々の趣味や趣向を考えると可能な限り1対1に近い状態で活動を行うことが重症心身障害を持つ方への生活連動型活動に必要な条件だと分かった。パラパラ漫画を破った行動と竜巻発生装置を見入っていた反応の違いは、Aさんの発達年齢や生活年齢に合う内容であったから、そして「水」という物質がAさんの趣味・趣向に合致したからといえる。加えて、竜巻発生装置は、水がただ落ちるだけのシンプルな構造であるが、回転して落ちるという見え方もあり、注目する点が多いものだった。視覚優位であり、見ることに興味関心があるAさんが見入っていた理由は、竜巻発生装置のほうが、パラパラ漫画に比べ視覚情報が多いからではないかと考察した。

VII. おわりに

重症心身障害者の生活連動型活動は、理解能力や発達のアンバランスに留意して行わなければ、楽しさや満足感は得られないと分かった。受け持ちの利用者をはじめ感じ方は様々であること、どの発達領域に着目して計画を実施していくのかをよく考える必要がある、と学習できた。

参考・引用文献

- 1)杉田祥子：発達評価に基づいた発達促進のための接し方と遊び、重症心身障害児のトータルケア—新しい支援の方向性を求めて(朝倉次男・監修)、へるす出版 2006 pp.50-53. 医歯薬出版株式会社